

## 海外におけるインターネットを使った勉強会の可能性

—USTREAM と Google+を用いた他地域との連携の試み—

Toward the possibility of study groups outside Japan via the internet:

An experiment connecting multiple locations with USTREAM and Google+

瀬尾匡輝（香港理工大学）・米本和弘（ブリティッシュコロンビア大学・マギル大学）・

青山玲二郎（香港城市大学専上学院）・山口悠希子（香港大学專業進修学院）

SEO Masaki (Hong Kong Polytechnic University), YONEMOTO Kazuhiro (University of British Columbia/McGill University), AOYAMA Reijiro (Community College of City University of Hong Kong), YAMAGUCHI Yukiko (University of Hong Kong-School of Professional and Continuing Education)

### 要 旨

本稿は、無料オンラインサービスを用いて世界中で働く日本語教師を繋げ、対話を通して自己研修型教師を目指す勉強会の実践について報告し、参加者の学びと実践の課題を分析する。具体的には、本活動を通して参加者は場所や時間を越えたオンライン勉強会の利便性を享受する一方、通信資源の格差や不特定多数に公開される事への不安を指摘していた。さらに、本稿では他地域の教師と繋がることの意義を考察し、海外で働く現職教師研修の新たな可能性について議論する。

This paper examines the practices of a study group that seeks to help Japanese language teachers based outside Japan to become self-directed teachers through dialogue using free online services, and discusses the group's benefits and challenges by analyzing participants' comments on their experiences. Based on the findings, the authors consider the utility of connecting teachers based in different areas and discuss the potential of such online communities for teachers working in various parts of the world.

**【キーワード】** 教師研修，自己研修型教師，海外，テクノロジー，対話

### 1. はじめに

本来であれば職場の同僚と問題を共有し、議論を交わすことが問題解決のためには重要である。だが、実際の教師同士の話し合いは自分たちの力や責任が及ばないところに原因を求め、問題の根本的な探求には及びにくいこと（金田，2009）や人間関係を気にするがあまりに核心を避け、表面的な議論に終始してしまうこと（中田，2011）が指摘されている。直接利害関係が生まれやすい同僚同士であればその傾向は尚更だろう。また、教師の仕事は忙しく、たとえ対症的であれ直近の問題を解決することが必要で、教育の将来を見据えた根本的な議論にまでなかなか及ばないのは一概に責められることではない。

筆者らもそれぞれ悩みを持っていたが、上述した理由から、自身の日本語教師としての存在や教育実践の在り方について真剣に考える機会を失いつつあった。しかしながら、そのような根本的な問いを避け、日々の授業を効率的に行うことだけに注力することの危うさも感じていた。教師が与えられたものや自身の知識のみに頼って教育実践を行うことは

インプットされたものをこなすだけのロボットと同じである。教師も人であり、日々考え自身の存在を模索し続けていくものであるとすれば、自らの実践を振り返り、思いや悩みを共有し、もがき苦しみながら、たとえ答えが見つからなくとも思考し続けることは大切なのではないだろうか。

そこで、現場で働く教師らが自身の実践・教師としての存在を改めて見つめ直す場を生み出すことができないかと考え、勉強会を主催することにした。本稿でいう勉強会とは、教師が自らの存在を見つめ直すための仕掛けの場であり、“明日のクラスを改善する”技巧や知識だけではなく、“教育の意義自体を問い直す”思考や態度を身につける学びの場として位置づけた。そして、インターネットを通じ同じ志を持つ世界中の日本語教師にもこの勉強会の輪を広げた。本稿では、インターネットを使った現職教師のための勉強会を通して、開催地である香港とオンラインで参加した他地域の教師らが対話することにより、参加者はどのように感じ、どんな学びがあったのかを 1) オンライン上に保存された勉強会やチャット、Eメール上でのやりとり、2) 参加者対象の質問紙調査を分析した結果から報告する。

## 2. 先行研究

### 2-1. 自己研修型教師

欧米における教師教育の議論を手掛かりに、日本語教師教育でも、岡崎・岡崎（1997）を契機として、「教師トレーニング」から「教師の成長」へとパラダイムシフトが起こり、「自己研修型教師」を目指す必要性が議論されるようになった（e.g., 縫部, 2010）。自己研修型教師とは、「他の人が作成したシラバスや教授法を鵜呑みにしそのまま適用していくような受身的な存在ではなく、自分自身で自分の学習者に合った教材や教室活動を創造していく能動的な存在」（岡崎・岡崎, 1997, p.15）であると定義される。つまり、教師には、ある特定のタイプの学習者を想定した日本語教育から脱却し、自らの実践をそれぞれの現場の実情に照らし合わせながら、批判的に考察し、改善していくことが求められている。

自己研修型教師は、「適切な研修を選択的に自らに課し、成長を続けていく」（林, 2006, p.22）ことが必要とされるが、その際には「教師が自分自身や自分の実践を語る場、そしてそれを共有する同僚が必要である」（横溝, 2006, p.319）。しかし、海外に限って見た場合、物理的、経済的、時間的制約などから、研修の機会を得ることが難しい場合があることも指摘されている（e.g., 西谷, 2002）。

### 2-2. オンライン教師研修

上記のように、海外で働く日本語教師を取り巻く環境は必ずしも恵まれたものではなかったが、近年、情報技術の発達に伴い、Eメールや掲示板などを使用した様々な形態の教師研修が行われるようになってきた（横溝, 2006）。また、オンラインテクノロジーでは、双方向のやりとりが可能となった Web2.0 の時代に入ったと言われ、地域を超えたインターネット上のやりとりが行われている。しかし、これまでのオンライン教師研修を概観すると、講義型の研修であったり、コースとして開設されたりしているものが多い（横溝, 2006）。そのため、自己研修型教師に必要な対話を重視した活動は皆無に等しく、海外の日本語教師が置かれた状況を考慮すると、一般に広く公開、共有されていない点が問題とし

て挙げられる。

### 3. 勉強会の目的と概要

本勉強会は、世界の日本語教師が参加する『つながろうねっと (<https://sites.google.com/site/sekaitsunagaru/>)』の活動の一部として行われたものである。つながろうねっとは、海外で働く日本語教師のネットワークを構築し、対話を通して自己研修型教師を目指すことを目的とし、Eメールによる日常的な意見交換、オンライン勉強会、授業実践の配信、ブログによる交流などを行っている。勉強会では、香港での現職教師向け勉強会を 1) USTREAM<sup>(1)</sup>で生中継し、2) Google+<sup>(2)</sup>の無料ウェブ通話で世界中の教師と繋ぎ、各地域の実践および現状の報告や議論をする活動を行った。そして、その上で各自何が出来るか探る対話の時間を別途設けることで一方的な知識の伝達ではない活発な議論を目指した。勉強会は 2011 年 9 月から 2 ヶ月に 1 度定期的に行い、所属機関、母語、経験年数が違う多様な日本語教師が毎回 25 名ほど香港会場に集まり、他地域からも毎回 5-8 名程度が Google+を用いてオンライン参加した (図 1 参照)。

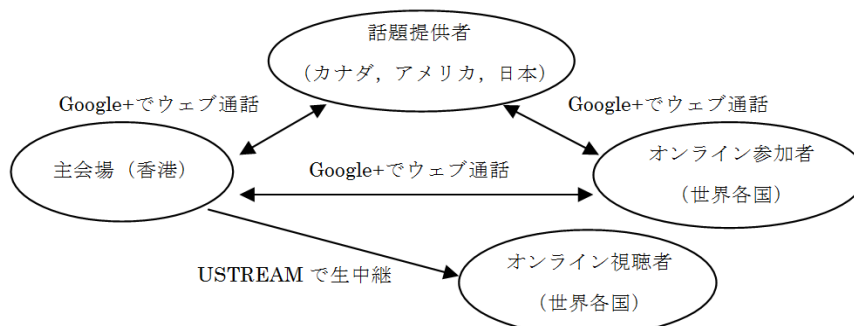


図 1 勉強会の実施方法

勉強会のテーマに関しては、筆者らが香港の日本語教育現場で特に有意義だと思われる内容を抽出し、つながろうねっとに参加する世界各地の教師らの意見を聞き、話し合ったうえで設定した (表 1 参照)。

表 1 勉強会の概要

日時	テーマ	話題提供者の所在地	Google+を用いて議論に参加した参加者の所在地
1. 2011 年 10 月 16 日	ひらがな・カタカナの指導法	香港	カナダ, マレーシア, 香港
2. 2011 年 11 月 27 日	敬語の指導法	香港	カナダ, 香港
3. 2012 年 2 月 19 日	教室外の社会と繋がる	アメリカ	カナダ, エジプト, マレーシア, 日本
4. 2012 年 4 月 29 日	継続学習を支援する -教育機関・教師間の連携-	カナダ	カナダ, エジプト, アメリカ, マレーシア, 韓国, 日本
5. 2012 年 6 月 24 日	自分の授業・実践を考える・記述する -日本語教師が繋がるための実践研究-	日本	カナダ, エジプト, フランス, ポーランド, ベトナム, マレーシア, 韓国

3 回目以降の勉強会では、議論を更に深めるために、勉強会を踏まえての座談会を行っている。その背景には、オンライン参加者から、リアルタイムで勉強会に参加し、話題提供者に質問を投げかけたり議論に加わったりしたいが時差の関係で難しいという声があった。そのため、勉強会にリアルタイムで参加できなかった人も参加できるよう時間を変え、座談会を実施した。座談会は、勉強会の内容に留まらない、内省・対話を通した、新たな可能性に向けた議論の場として設定し、参加者それぞれの勤務地でどのような実践が実現できるかを話し合うことにした（表 2 参照）。

**表 2 座談会の概要**

日時	議論した内容	参加者の所在地
1. 2012 年 3 月 4 日	各地域や各地域間で「教室外の社会と繋がる」プロジェクト活動としてどのようなことができるのか、さらなる可能性を含めて議論した	アメリカ, ポーランド, マレーシア, カナダ, 香港
2. 2012 年 5 月 12 日	自分の身の周りのアーティキュレーションの現状, 現在の職場でアーティキュレーションを取り入れるにはどういった対応が可能か, また必要かについて, 参加者からの質問を基に議論した	カナダ, ポーランド, マレーシア, フランス, 香港
3. 2012 年 7 月 23 日 (オンライン配信なし)	自身の実践をどう記述し, 分析するのか, お互いの実践を持ち寄り議論した	日本, 香港

なお、勉強会、座談会とも、話し合いの際には Google+ を使い、USTREAM で配信・保存した（但し、2012 年 7 月の座談会は参加者の意見を考慮し、配信はしなかった）。これまで勉強会及び座談会には、日本、韓国、香港、中国、マレーシア、ポーランド、フランス、カナダ、アメリカから参加があった。

#### 4. 活動の考察

ここでは、勉強会の参加者がどのように感じ、どのような気づきを得たのかを 1) 企画段階である 2011 年 8 月から本稿執筆時点の 2012 年 9 月までの運営者の E メールやチャットのやりとり、2) 各勉強会終了後に会場・オンライン参加者を対象に行った質問紙調査、3) オンライン参加者の 2012 年 2 月以降の自己内省ノートを分析した結果から報告する。質問紙調査によると、参加者は次のように述べ、勉強会は概ね肯定的に捉えられていた。

*IT 技術を駆使し、とにかく日本語教育関係者をつなごうとする本研究会の運営姿勢に感服しました。すばらしい試みではないかと思います。(質問紙, オンライン参加者)*

*これからもインターネットを使って、勉強会を放送し続けてください。あいにく足を運んで参加できない方にとっては非常に便利でした。(質問紙, オンライン参加者)*

会場まで行く都合がつかない場合にうちにいながらこういう勉強会を視聴できるのは助かります。グループ内の意見交換や懇親会でのメリットは得られませんが、会場に行くのと行かないのとで利益に差が出るのは仕方がないと思うので、これで良いと思います。（質問紙，オンライン参加者）

特に、オンラインで配信したことに関し、物理的な参加を必要としなかった点、インターネット上に保存したので、勉強会当日以降も視聴可能であった点などで評価されていた。

また、同一地域内に留まらず、地域間を結んだ点を評価する声も聞かれた。同じような悩みや課題を持つ教師の存在は刺激となり、参加を続ける動機づけにもなったようである。

いろいろな国の取り組みがわかってとてもよかったです。香港という狭い地域だけでなく、グローバルな視点で日本語教育をとらえることができる非常によい機会になりました。（質問紙，会場参加者）

色々な国の話を聞くことは直接自分の教授活動に関わらなくても刺激になりました。（質問紙，会場参加者）

メンバー間で交わされるメールのやりとりを見るだけでとても刺激になっていますし、そんな中からちょっとした考え方へのヒントが得られることも実際にありました。【中略】私にとってこの会は自己研修継続のためのメンター的存在であると言えるでしょう。（内省ノート，オンライン参加者 A）

普段からできるだけ内省はするようにしていますが、より具体的に他で頑張っている先生方の様子を知る／イメージできたので、さらなる動機づけになりました。（内省ノート，オンライン参加者 B）

会場・インターネットなどの参加方法の如何に関わらず、他の参加者と意見交換し、日頃の実践や活動を他者に伝える過程で、無意識のうちに抱いていた教育観を振り返り、新たな視点からの考察が可能になったことも窺われた。特に、ある地域での常識が、他地域では全く当てはまらないことに気づき、現状を批判的に見る必要性を意識したようである。

他の地域の日本語教育もだいたい自分の知っている日本語教育と似ているだろうと勝手に思っていたのですが、新しい発見がたくさんありました。（内省ノート，オンライン参加者 C）

人に自分のやり方を伝えながら、なぜ自分はその方法をとるのかについて考えざるを得ませんでした。（内省ノート，オンライン参加者 D）

さらに、オンライン参加者らの提案で、3 回目以降、勉強会を視聴した同じ地域内の教師らが自主的に意見交換を行った後、座談会という形で再び他地域と共有するという新たな

な活動を行うに至った。このように勉強会後も他の参加者と話し合ったり、オンライン上で続く対話から地域間のみならず、各地域内でも、他校の教師や同一教育機関の同僚間でそれまでになかった主体的な対話が新たに生まれたと各地域の参加者から報告された。

しかしながら、一方で、勉強会がオンライン配信され、不特定多数に視聴されることから参加を難しく感じる教師もいた。

実はメールや、この内省ノート、ブログなどでの意見交換にはそれほど抵抗がないのですが、勉強会や授業を Ustream で公開となるとやはりちょっと尻込みしてしまいます。今までサイト上で公開されている講義の類を見ても、そのような気持ちは抱かなかったのですが、この会の活動を通じた活動だと「うーん、私もいつかやるのかなあ...映像だ...」と思うと、ムムム。またこの会のメンバー以外の人も視聴可能なのだと思うと、またもやムムム。(内省ノート、オンライン参加者 A)

議論という形で自分が即興で話している様子が「オンラインに公開され、半永久的に保存され、不特定多数の人に見られる」というのは、たんなる契約社員の一教師にすぎない私にとってもこわいものです。(E メール、オンライン参加者 E)

(アーティキュレーションについてディスカッションする際には、権力関係について話す危険性もあり、) 今回は座談会に出席して話が出来ない、という人もいます。狭い世界なので、ひとことで明日の糧が奪われてしまう、という恐れもあるからだと思います。(E メール、オンライン参加者 F)

また、地域や年齢によって通信資源やオンラインに対する考え方やリテラシーの差、インターネットの規制などがあり、参加したくてもできないという声もあった。

広東省の先生から中国国内では USTREAM のサイトが開けないという連絡がありました。(E メール、運営者)

3 月のディスカッションも参加できればと思いますが、マレーシアで夜 10 時からということですね。これも回線次第で参加できるかどうかわかりません。(すみませんマレーシアはまだ雷や大雨だと途切れてしまうことがよくあるので不安です) (E メール、オンライン参加者 G)

最終的には心というか、(オンラインで) 公開／非公開の問題は個人の好き嫌いの問題も大きいような気がします。世代差ってこともあるかもしれませんが。(E メール、オンライン参加者 A)

さらに、勉強会の内容に関しても、運営者・現地の参加者・他地域の参加者の間で完全にはコンセンサスが取れていなかった点が課題として浮かび上がってきた。本勉強会では、

最初「ひらがな・カタカナ」や「敬語」の指導法など、現職教師の授業実践にすぐ結びつきやすい特定の学習項目を取り扱っていた。だが、単に与えられたものをどう教えるかを共有するのではなく、自身の実践のあり方自体を批判的に考察する自己研修型教師を目指すという目的を考慮し、3 回目以降はより教育の在り方自体を問う内容を扱った。しかし、そのことで香港の参加者の中から、読解教材、聴解教材、もしくはある特定の教科書の使い方の紹介・アイデア交換など明日の授業ですぐ使える“技巧や知識”的なものを求める不満の声が聞かれるようになった。

*決まった教科書を使って授業の内容を充実させる取り組みをしている方からのお話・提案を扱って欲しいです（質問紙、会場参加者）*

*会話のクラスのすすめ方を知りたいです（教科書の内容をどう扱うか、実際に学生が使えるように、etc）（質問紙、会場参加者）*

*次のテーマは、読解教材の使い方、聴解教材の使い方、「みんなの日本語中級」のそれぞれの使い方の紹介・アイデア交換 etc はどうでしょうか。（質問紙、会場参加者）*

インターネットで頻繁に連携を取っている参加者にはなぜこの活動をしているのか対話をする機会が幾度かあったが、香港内の参加者にはいつでも会えるという気持ちから本活動の方向性について具体的に話し合っただけでよかったことが原因として考えられる。このことがオンラインと香港の参加者が本勉強会に求めるものに隔たりを生んでしまった可能性がある。

## 5. フォーラム参加者との議論を通して

フォーラムではグループに分かれて、「①これまでどのような勉強会に参加したことがあるか、②役に立った勉強会・役に立たなかった勉強会はどのようなものか、③理想の勉強会とは」というトピックに基づいて意見交換を行った。残念ながら会場全体の反応は、総括の話し合いが行われなかったため、掘り込むことができなかった。しかしながら、筆者らがグループに分かれて話し合い、またフォーラム終了後に興味を持ってくださった方々と意見交換をしたところ、「なぜ他地域の教師とつながる必要があるのか」、「つながることでどんなメリットがあるのか」という点に意見や質問が集中した。当日は筆者らの思いや考えをうまく伝えることができなかったため、本節では、それらの質問に答えるべく、もう一度“つながる”ことについて考えてみたい。

他地域の教師とつながる必要性への質問の背景には「もうすでに同僚や親しい教師の間で深く話し合える場があり、あえて他地域の人々と交流する必要はない」という恵まれた環境があるようであった。しかし、このような恵まれた環境の背景には現在の都市部集中型の日本語教育の問題が存在するのではないだろうか。文化庁（2011）の調査によると、日本で働く日本語教師は 31,064 人いるが、その多くが都市部に集中している（e.g. 東京都圏約 43%、関西約 23%、中京圏約 10%）。このように、日本語教育が盛んな都市部であ

れば同僚教師や親しい教師と直に顔を合わせて話し合えるのかもしれないが、海外の日本語教師の中には、同僚教師もおらず、日々葛藤の中で日本語を教えている者も多々いる。また、フォーラム当日に日本国内の地方都市においても同様の傾向があるという報告があった点を考慮すると、教師をつなぐ本活動の意義は強く、今後も大きな可能性があると言える。

さらに、同僚教師や親しい教師と定期的に日本語教育について話し合えるような関係性をすでに構築していたとしても、他地域の教師とつながることによってこそ得られる効果もあると考える。まず、同じような研究テーマや実践に興味を持った教師の輪が世界中に広がることである。そのような輪によって、他地域の教師らの意見や活動を垣間見、自身の環境とは異なる視点からの考察が容易となることは上で述べた通りである。また、自分の実践を他地域の人にもわかるように伝えることにより、無意識に抱いていた自身の教育観を振り返り、日頃の実践を批判的に見ることができるようになるという点は他地域の教師とつながる大きな利点であろう。

さらに、異なる興味を持つ参加者同士であれば、話し合いを通して新たな知見を得られることもある。例えば、本活動に参加した教師 H は他地域の教師の実践を見て、これまで興味のなかった分野の実践について知り、自身の授業へ生かそうと模索し始めている。

こうやって、ほかの方の実践を知り、それを共有してもらえるとというのは本当に僕の教師としての成長につながると思います。つながろうねっとに参加したことでそういったことがもっと身近に感じられるようになりました。(E メール、教師 H)

また、教師 I もこれまで自身は興味が無いと勝手に思い込み避けてきたテーマについて勉強会を通して触れることで、新たな興味として模索し始めている。

実は、アーティキュレーションって、どうすれば容易に学習者の連携ができるのかについて話し合っているのが、教育の普遍化や統一化を目指すものと勝手に解釈していて、自分とは考え方が違うなと勝手に避けていました。でも、○○さん[話題提供者]のお話を聞いて、アーティキュレーションというのは「Think Globally, Act Locally」のローカルという側面が強いようで、現地の多様性をどうつなげるのかという議論で、自分自身の興味とも合致して、今はすごく興味があります。(内省ノート、教師 I)

このように、これまで自身が当たり前だと思い込んでいたことを他地域の実践を垣間見ることにより、批判的に振り返ることができるのである。もちろん他地域とつながらなくとも、同じ地域内・教育機関内で異なる実践を行う者と話し合うことで、自身の実践を振り返る機会も得られるだろう。もし得られるのであれば、何ら問題はない。しかし、前述したとおり、全ての教師がそのような関係性を各々の現場で構築できているわけではなく、そもそもそのような環境にない場合もある。本勉強会は、そのような教師にとっての関係性構築の場となったのではないだろうか。



筆者らは、勉強会をオンラインで配信し、他地域の教師とつながることにより以下のような自身の実践を振り返り、改善に繋がるサイクルが創出されたと考えている(図2 参照)。

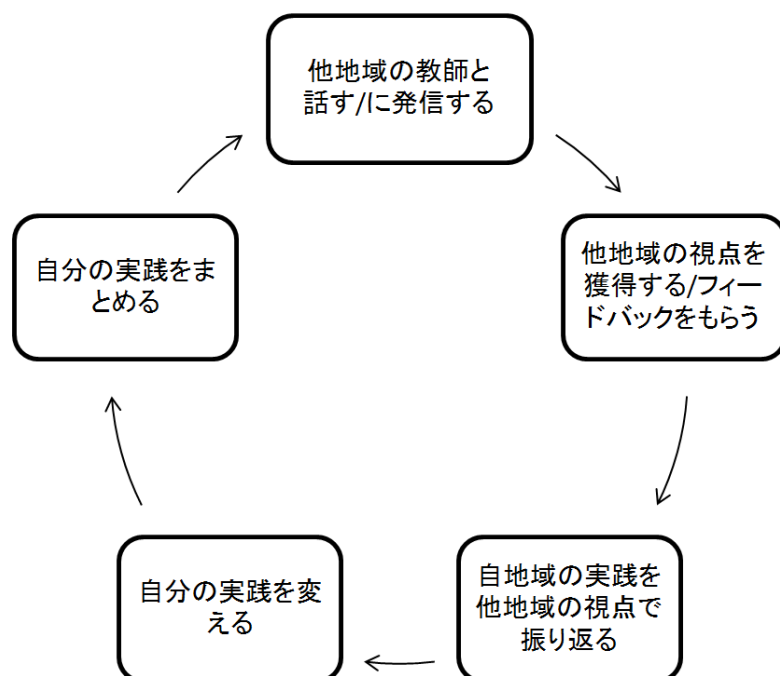


図2 他地域とつながることによって得られるサイクル

舘岡ら (2012) は、これまでの「教師の成長」は「教師個人の資質や能力、技能を成長させる」(p. 24) という側面にばかり焦点が当てられていたが、複雑化した日本語教師を取り巻く文脈を考慮すると、周囲との関係性を含めた教師の成長という議論が必要だと主張している。その中で大切なのは異なる経験や価値観を持つ者同士の対話ではないだろうか。中野・堀 (2009) は対話を「言葉を通して率直に話し合う中で、なにか新しいものを一緒に生み出していく、共に作り出していくこと」(p.89) と定義している。そして、対話とは単なる情報交換や関係性の構築を目的にする会話とは異なり、会話に参加する者同士が会話で使っている言葉の意味づけや価値観を交換し合うことで対話になるのだという。本実践に参加した教師らも、自身の実践をただ単に紹介しあうのではなく、他地域の教師にも理解しやすいように、実践の意味づけや価値観を交えた説明や話し合いを行っていた。これは、舘岡ら (2012) がいう、地域を越えた周囲との関係性の中で、自分自身の教育実践のあり方や日本語教師としての存在を内省し新たな実践を生み出そうとする行為であり、自己研修型教師を共に目指し、継続していく場としてのオンラインでの教師研修の新たな可能性を示しているのではないだろうか。

## 6. おわりにー能動的な参加・継続を目指してー

このように自身の教育活動を内省する場を創出し、インターネットを用いてその輪を広げていくことで、経験や思いを率直に語り合い、将来取り得る行動・考え方の建設的な模索をする教師の対話が世界中に広まっていった。オンラインであるが故の難しさや本勉強

会の趣旨となる考え方に馴染みがない教師からは不満の声も聞こえたが、筆者らが本勉強会を通して実現したいのは目先の技巧や知識の獲得ではなく、なぜ私達は日本語を教え、何を指すのかを根底から考え直すことである。そのためには、運営者だけが主導権を握り押し進めるのではなく、参加者が能動的に本実践に携わり、勉強会の企画に加われるシステムが必要となる。さらに、世界の各地域で同じような場が生まれ、それらがつながっていくのが理想である。

## 謝辞

本実践は、『つながろうねっ』に参加してくださっている有森丈太郎先生、岡村恵先生、北出理恵先生、鬼頭夕佳先生、佐野香織先生、芝原里佳先生、寺田庸平先生、橋本拓郎先生、古屋憲章先生、ユンホスク先生の協力なしには実現しなかった。今後も共に自己研修型教師になるべく連携していきたいと思う。

## 注

- (1) 利用者が動画を投稿したり、視聴したりできる動画共有サービス。  
<http://www.ustream.tv/>
- (2) Mixi, Facebook のようなソーシャルネットワーキングサービスのひとつ。  
<https://plus.google.com/>

## 参考文献

- (1) 岡崎敏雄・岡崎眸（1997）『日本語教育の実習－理論と実践』アルク
- (2) 金田智子（2009）「日本語教師の育成および成長支援のあり方：「成長」にかかわる調査研究の推進を目指して」河野俊之・金田智子(編)『日本語教師の過去・現在・未来 第2巻「教師」』第1章，凡人社，pp.42-63.
- (3) 舘岡洋子・ロマンパシユカ・崔鉉弼・鈴木寿子（2012）「日本語教師の成長を支えるものは何か」『日本語教育国際研究大会名古屋 2012 予稿集第2分冊』pp. 24-25.
- (4) 中田賀之（2011）「学校文脈における英語教師の同僚性とオートノミー」青木直子・中田賀之(編)『学習者オートノミー：日本語教育と外国語教育の未来のために』第7章，ひつじ書房，pp.193-220.
- (5) 中野民夫・堀公俊（2009）『対話するカーファシリテーター23 の問い』日本経済新聞出版社
- (6) 西谷まり（2002）「海外における日本語教師ネットワーク－勉強会と Mailing List の効果的な活用－」『一橋大学留学生センター紀要第5号』
- (7) 縫部義憲（2010）「日本語教師が基本的に備えるべき力量・専門性とは何か」『日本語教育』144号，4-14.
- (8) 春原憲一郎・横溝紳一郎編著(2006)『日本語教師の成長と自己研修－新たな教師研修とストラテジーの可能性をめざして』凡人社
- (9) 文化庁（2011）『平成23年度国内の日本語教育の概要』  
<[http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/jittaichousa/h23/pdf/h23\\_hanrei.pdf](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittaichousa/h23/pdf/h23_hanrei.pdf)>  
(2012年10月19日)